

【冷徹支配】冷徹シェアハウスオーナーの無慈悲な強制教育。
～隣室に響く水音、声を出せば即退去。彼専用の愛玩人形に堕ちるまで～

サンプル（一部抜粋）

【シェアハウス】

（深夜・巡回の足音）

「...ん...？
俺のシェアハウスになぜ下着が落ちてる...？」

「.....なるほどな。
持ち主はあいつか。...いや、誘っているのか。」

（重厚な足音・ドアのノック音）

「...俺だ。開けろ。」

（ガチャッと扉が開く音）

「この下着、共有スペースに落ちていたぞ。
常に清潔に、私物を置かない...それがこの家のルールだと言ったはずだが？」

「...ただ落としただけ？
...そんな言い訳が通用するとでも？」

「...赤い顔をしているが...
お前、それをわざと落としただろう。」

「そういえば隣の部屋のアイツは、お前のことを『守りたくなるほど純粋だ』と褒めていたぞ？」

「...まさかこんなに乳首を立てて、指で乳首を撫でるだけで息を乱すなんて思っていないだろうな。」

「...声がうるさいな。
周りの部屋のヤツから苦情が来たら、お前は退去になる。
オーナーとして、そう処理せざるを得ないからな。」

「特に隣のアイツは、お前の声なんて聞こえたら気が狂うだろうな。
恋愛禁止で必死で我慢しているのに...ってな。」

「お前、親がいないんだったな。
だからここに来たんだろう？」

「なら、もっと必死で声を我慢しろ。自分の未来の為に。」